



教育計画の実践

大和郷幼稚園 村瀬祥子

低くさがってきた空にさくらのピンクが色どられるようになった四月十日、はじめて幼稚園の門をくぐり、お互いに不安な顔でならみ合い、集まれば蜂の巣をつついたような始末だった子どもたちも、わずか三か月足らずのうち、クラスをあげて共同の遊びを楽しむことができるようになりました。その第一保育期末の遊びの一日を記してみたいと思います。

x x x x x

①クラスの状態について

このクラスは二年保育児——といっても、四月から十月生まれなので年少組（四才児）の中では大きい方の子どもたちで、それぞれ強い性格を持ち、知能年令も比較的高く、年少組らしい幼ない感じはあまりない。

●クラス編成

男児十五名 女児二十名 計三十五名

●幼児年令

四月生れ 四名 八月生れ 四名
五月生れ 九名 九月生れ 一名

六月生れ 七名 十月生れ 四名
七月生れ 五名 十一月生れ 一名

●知能（田中ビネーによるIQ）

一〇〇～一一〇 四名
一一一～一二〇 七名
一二一～一三〇 十二名
一三一～一四〇 七名
一四一以上 五名

クラス平均 一二七

●兄弟関係

一人子 六名
末子 十五名
長子 九名
兄弟の中間 五名

●家庭環境（保護者の職業）

会社員 二十
商業 六

医師 二

公務員 一

その他 六

● 保育室の広さ 十二坪

② 四月からの状態

入園後一週間もしたらほとんどの子どもが愉しく遊びにはいれるようになり、ままごとなどのグループ遊びも行われた。新しいお友だちができてうれしくてうれしくてたまらない様子もよく伺えた。毎日涙をこぼしていた数人の子どもも、鯉のぼりの立つ頃にはすっかり慣れて、楽しい生活を始めた。五月上旬の遠足を機会に、ひとりぼっちの人はなくなった。こうして割合に早く子どもの心も安定し、友だちに親しみ、集団生活にも慣れ、楽しみ、生活の習慣もついできた。

子どもの遊びとしては、

● ままごと、お人形ごっこを含めたお家ごっこ。

● お砂あそび

● 年長組の脅威がなければホールで箱積木を使って家や船、汽車などを作って遊ぶこと。

● 「あぶく立った」「花いちもんめ」「ロンドン橋」などの遊び。

● 五月半ばより非常に暑くなったので、色水作り、色水屋さんごっこ、水鉄砲などの水あそび。

● カメやおたまじゃくしを泳がせたり、かいこをかわいがったり、虫とりなどのあそび。

● その他自由画・ぶらんこ・鉄棒など実に盛んによく遊ぶ。

またこのクラスの特徴として、年長組のおにいさまおねえさま

ちにあこがれ、すすんでいっしょに遊び、いろいろ輸入する。そのため、私の予想以上に伸び、進んでいく。製作、リズム（ゆうぎ）、お話などにもとても興味を持ち、いつも目を輝やかせている活発な子どもたちである。

そこで、六月半ば頃より、保育を誘導する一つのテーマに基いて、子どもの生活にまともりを持って発展させていきたいと思った。

③ テーマおよび目標

● テーマ

▽ つりばりおよび魚屋さんごっこ。

（ただし、子どもの状態によりつりばりのみでもよいし、興味があれば魚屋さんまで発展させる）

● 目標

▽ みんなの協力による共同の遊びのたのしさを味わう。

（年少組の第一保育期なのでとくに共同遊びに主眼を置き、みんなが進んで遊びに参加し、仲良く楽しく遊んでほしいと思った。）

その遊びを通じて子どもの社会性がよりよくなることを望んだ）

▽ 水族館やお魚屋さんにいきいろいろの魚の観察をしたり、それを作ることによって魚に対する関心を深める。

（小さいながらも、なるべく魚の色・形・特徴などを正しく観察し、正しくつかんでいくように導いた）

④ その進行状況

六月も半ばを過ぎて暑さもいよいよ本格的になってきた。その中で、保育室に置かれた金魚がともきれいで、涼しそうで子どもに好かれる。お部屋には、五月下旬よりカメもいてみんなのいいお友

だだし、ちょうどこの頃一人の子どもがカニを持ってきたのでとてもにぎやかだ。暑くなれば誰しも水が恋しくなる。そこで水遊びが好まれるが、それと併行してこれら水の生物に子どもとの関心が集まってきた、それを相手にして遊ぶ。

まずこうした身近なものから「魚」にはいつていく。つまり金魚が「魚」への入口になり金魚の観察、話し合い、歌、製作などをする。その後、浦島太郎の紙芝居をみたり、話し合ったりして、机の上の金魚から次第にいろいろな「魚」へ興味をひろげていく。

そのような六月末の一日、園外保育として上野の水上動物園を見学、水族館のかずかずの珍しい魚にすっかり引きつけられた。帰って来ると早速、おもしろかったお魚の絵を描いてみる。描いただけではものたりないので、お魚づくりが始まる。自分の頭ほどもあるりっぱない、スマートなかつお、こっけいなぶぐ……など特徴のある魚ができる。

「お池つくろうよ」

「お池にこのお魚いれましようよ」……

そして大積木で囲って、保育室の一隅に一坪あまりの池が作られ、魚がはなされる。

ここまでくると子どもとの興味はつきつきとくりひろげられていくので、私は子どもに混って遊んだり話し合いながら、表面に出ないようにして誘導していく。

「お池で泳ごうかなあ」

「このお魚つかまえちゃおうかなあ」

「そうね、お魚釣りをましようか」

「お魚釣りしよう、お魚釣りしよう」

「でもこれだけじゃ、ちょっと釣ったらすぐいなくなっちゃうね」
「それじゃもっとたーくさんお魚つくりましよう」

それかららはみんなが一生懸命魚を作る。魚だけでなく、いかも、たこも、かいらも……。

子どもたちが朝登園してはじめて釣り竿を見つけたときの笑顔の輝きはすばらしかった。上手に何匹も釣り上げる子、

「わーい、釣れた釣れた！」

「こんなに、僕六匹も釣っちゃった」

なかなか釣れない子もいる。落ちついて集中してやっとな釣れたときは本当にうれしそう。ときどき釣り糸がからまる。始めのうちはそれを振るので余計にからみ合う。が、だんだんと自分たちでいねいに糸をほごすようになった。お魚がたくさん釣れるようになると、釣った魚を入れるうづわが欲しくなるので、空箱利用でびくを作り始めた。子どもたちは毎日お魚釣りをたのしみにして登園する。

⑤七月十日——こうした遊びの生活の一日

●予想される活動（夏期短縮午前中保育）

▽お魚釣りをして遊ぶ——なるべく糸をからませないように注意し、釣り競争などして仲良く遊ぶ。

▽お魚やびくを作る——楽しんで作り、またそれを用いて遊ぶよるこびを持つ。

▽ホールでゆうぎをする——曲を聞いてリズムを正しくとる。自由な表現をする（この日はホールを使う番になっている）

●保育記

そろそろ梅雨があける時期なのに、また雨降りだ。保育室の広さ

に余裕が無いので雨の日はこちらがうんざりする。しかし子どもはいたって元気な顔で、八時十分頃からポツポツ登園して来る。ご挨拶はみんなとても上手だし、この頃では大体の子ともがうがい手洗いを忘れないようになった。九時頃には大方の人が登園して保育室はにぎやかだ。用済みの子どもはすぐに遊びに入る。男児は殆んどがすぐ釣りを始める。子どもたちは、雨に災いされてはいない。雨が却って幸いで、平素はいつも外にとび出してしまいう子も今日は釣りに打ち興じている。びくのできた人は未だ少数なのでなかなか得意だ。それを見て「僕も作ろう」「私もする」と空箱にきれいな色の絵の具をベタベタとぬり始める。製作の態度が男女違うのでおもしろい。男児は、それを使うのが目的で作るのだが、女兒は作ることに自分が大好きなのだ。お魚作りをしているのも女兒の方が多い。数人の女兒はままごとをしている。私はびくのひもをつける手伝いをしたり、お魚作りの人たちといっしょに魚図鑑を見て話し合ったりする。それぞれの仕事に多くの子どもが参加しているようで、各グループのメンバーは少しずつ変化していく。

そのうちY子ちゃんが椅子をガタガタといくつも並べ始めた。彼女はいつも遊びが上手でいろいろ考え出す子どもなので何が始まるのかと隅から眺めている。Mちゃんが何となくそれを手伝いながらきく。「どうするの?」

「私は、魚屋さんになるわ」
「僕も」とすぐ同意する。

「ねえ、そこのお魚釣っている人、りょうしさんよ。わたし魚屋だからそのお魚もって来てよ」

気のいい豆漁師たちはすぐに賛成して釣れた魚をY子ちゃん、M

ちゃんのお店に届ける。それを椅子の上きれいに並べて魚屋さんが始まった。私はすっかり嬉しくなってしまった。「釣りばり」を「魚屋さん」に発展させることに少し不安を抱いていた私は、こうして子どもの中から伸びる芽の萌え出したのに感激した。私は早速ままたごの人たちを誘ってお魚を買いに出かけた。

「下さいな、赤いたいを一匹といかを下さい」

「はいはい、どうぞ」

買ったお魚はお家ごっここの台所へ、そして食膳へ。こうして「つりばり」と「お家ごっこ」が、「魚屋」を仲にして結ばれ、クラスの大勢が一つの大きな遊びに伸び展がっていく。せつかくなので私はおゆうぎをするのを止めることにした。

ただ今日はやや運動不足なので、遊びの潮も引いたお帰り前のひととき、ホールにいき、曲に合わせて少し歩いたり走ったりした。

最近ピアノのリズムをよくとれるようになってきた。魚釣りに困んで一つだけ「タコサン」をした。

お帰りのとき、今日の遊びの楽しかったことを話し合う。お金を作ることや、もっといいお店を作ることや、他のクラスの人にも売って上げることなどがいい合わされ、明日を、明後日を、たのしみにして帰る。予想以上に発展し、子どもに導かれたような一日だった。子どもの帰った後、私は、お金を作る紙を切ったり、お店のノレンにする紙を出したりして、心愉しく明日の保育の準備をするのだった。

この後、夏休みまでは、魚屋ごっこが十分もり上り、また、夏休みを迎える準備で第一保育期を終りました。ここにあげた一日はとくに愉快な日でした。